

書籍紹介

『宗教と過激思想 現代の信仰と社会に何が起きているか』

藤原聖子著、中公新書 2642、2021年5月25日、860円+税

本書は東京大学大学院教授で気鋭の宗教学者、藤原聖子教授による最新の新書である。新書という体裁をとっているが、本書の内容は決して新書版に収まるものではない。言うまでもないことであるが、宗教史の知識に精通し、宗教の哲学的研究においてはわが国では右に出る者はいないと誰しもが認める才能の持ち主である。

本書のテーマは、今日の世界で政治経済の面だけでなく、人々の精神的状況にも大きく関わり、日常生活の中に深刻な影響を与え続ける問題に正面から取り組んだ渾身の提言もある。私たちが、遠い世界の恐ろしい出来事ではあるが、たまに運悪く遭遇することがあるかもしれないという程度の事件であるとして、多くの場合、見過ごしてしまう出来事が、実は私たちの身近なところに原因や問題の萌芽があることと、私たちが常に真剣に取り組まなければならぬ問題であることを教えてくれる著作でもある。これについて著者は以下のように世間の対応を批判している。

「・・・過激派を抑えるための啓発活動が中途半端になりがちで、過激思想に惹かれる若者が後を絶たないのは、そのような運動が公正という問題につきまとうジレンマを直視せず、過激思想を単に異常思想として済ませることが一因なのではないか。(227頁)」

本書は新書版という制約の中で、世界史上に発生した宗教的異端や、宗教的過激思想による事件や問題などについて、複雑な経緯をわかりやすく簡潔に説明してくれている。それは、著者の真摯で緻密な研究の成果を、惜しみなく且つわかりやすく私たちの前に差し出してくれているからである。過激思想による問題点が簡単に言い切れるような軽いものだったなどと考えることは、何も理解していないことになる。

著者によれば、本書の目的は、特に宗教に関して使われる「過激」という語の内実や「過激思想」の特徴を解明することであると断言して、思想の解説を中心とするとしている点は、他書にみられない鋭い判断である。つまり、複雑な過激思想と過激行為の全般を対象とするのではなく、事件の深いところで、それらの中核をなすと思われる「過激とされた」宗教思想を検討することによって、改めて効果的な啓発活動に資することになると思われるからである

朝日新聞7月10日（土曜日）の「読書」欄に柄谷行人氏による書評が「一神教に由来」ではありえない」として掲載された。これはまさに「何も理解していない」発言ではないだろうか。著者は、巷では往々にして過激思想は一神教によることが多いといわれるが、決して「過激思想は一神教だけに起こるものではない」と何度も強調しているからである。「一神教だけに起こるものではない」と「一神教に由来ではありえない」とは、まったく意味が異なる。

過激思想によって引き起こされるテロや軍事的暴力などは、キリスト教、ユダヤ教、イスラームなどの一神教の信徒によって発生する際には、特に日本では、一神教全般に対する非難が巻き起こることが多い。しかし、日本も含めた世界的な視野でみると、「宗教的過激」とは、一神教だけでなく仏教や神道、ヒンドゥー教などの民族宗教、特定の政治的思想、哲学的思想などに至るまで、あらゆる人間の営みを背景に暴力的手段で目的を果たそうとする人々の思想を指す言葉でもある。

こうした立場から、著者は「終章 宗教的過激思想とは何か」で以下の4点を「宗教的過激」の共通性として挙げている。この4点について簡単にまとめて紹介する（218頁）。

- ① （その思想を掲げる側から見ての）公正な社会を求めている。
- ② 切迫性がある。
- ③ 世俗的・近代的方法ではその社会的公正は達成できないと認識している。
- ④ 自分の宗教は公正さを実現する最善の方法を提供すると信じている。

著者は④に「自分の宗教」を挙げているが、これには自分の宗教だけを最善の方法として強制的に広めようとする立場だけではなく、広い意味での使用として、「自分の宗教に基づく幅広い思想的運動」なども意図されていると考えられる。その点についても、著者は、自分の宗教を広めようとはしなかった日蓮宗の井上日召やダライ・ラマなどの立場を引いて、「自分の宗教」という意味の広義での使用を採用している。このような記述にも「過激思想とはなにか」について重要な意味が与えられていることに注意をする必要がある。「過激思想」とはきわめて複雑な思想なのである。

持ち運びがしやすい新書版であることを利用して、読者には何度も繰り返して丁寧に読んで欲しい。「宗教的過激派によるテロ」はイスラーム教徒だけが起こすものでは、決してないが、特に中東地域に関心をもつ人々にとって「宗教的過激」とは何かについて、毀誉褒貶を脱して客観的に学んでほしいと願うものである。 （紹介者：塩尻和子）



『13歳からのイスラーム』

長沢栄治監修、かもがわ出版、2021年5月1日、1600円+税

本書は、東京大学名誉教授で、長年、中東地域、特にエジプト社会を中心に幅広い研究を行ってきた長沢栄治の監修による一種の教科書である。長沢は中東地域についての専門家であるが、近年、イスラーム世界のジェンダー研究に関する大型のプロジェクトを率いて、目覚ましい研究活動を展開している。その長沢が監修した本書は、イラストや写真を多用しており、面白いことに若い世代の読者を対象としている点がユニークである。しかし、『13歳からのイスラーム』だからと言って、大人が読んではいけないなどというものでは決してない。むしろ、一般に複雑でわかりにくく近づきにくい宗教だとして遠ざけられる傾向がある「イスラーム」を、わかりやすく柔らかく、しかし正確に丁寧に解説した教科書として、中学生にも大学生にも、そして大人にも読んでほしい構造になっている。

イスラームは現在、世界第2位の信徒数を持つ宗教である。しかも、イスラームに対する無理解や誤解や嫌悪感、つまりイスラーモフォビアが蔓延する今の時代にあっても、信者数は日に日に増加している。現在の中学生や高校生が社会に出るころには、キリスト教のあらゆる宗派を加えても追いつけなくなり、イスラームは世界第1位の宗教勢力を持つことになるだろうと予想される。今後数年のうちに、世界の人々の3人に1人がイスラーム教徒となるかもしれない。つまり、社会に出て、どんな仕事に就こうとしても、イスラーム教徒と

ともに仕事をする可能性が極めて高くなる。イスラームを学び理解することが、近い将来の世界で生きる上で必須条件となることは、もう見えている。

イスラームは本来、キリスト教や仏教などの世界宗教と同様に、究極の目的として「人々を救い、社会に平和をもたらす」という教義をもち、独自の歴史的展開のなかで発展してきた。私たちが目の前に蔓延するイスラーモフォビアに影響されることなく、イスラームを客観的に正しく理解し、身近なイスラーム教徒の友人・知人たちとともに穏やかな共存社会を築き上げることが、本来、望まれていることである。

本書はそのために若手の専門家を招集して執筆された教本であるが、実は大学受験の世界史や倫理といった科目的参考書としても、きわめて有益であり、身近に中高生をお持ちの方々に特にお薦めしたい。執筆者が「大学の一般教養の教科書にも使える本になったと思う」と言っていることも、本書の特色をよく表現している。　（紹介者：塩尻和子）

『フィールド経験からの語り イスラーム・ジェンダー・スタディーズ』

長沢栄治監修、鳥山順子編著、明石書店、2021年6月10日、2500円+税

本書は、『13歳のイスラーム』を監修した長沢栄治が中心となって活動をしている大型の科学研究費プロジェクト「イスラーム・ジェンダー学」の研究成果を公表する冊子の第4巻として出版されたものである。表題のとおり、プロジェクトに参加している研究者たちの「フィールド経験」をもとにして執筆されたもので、主に大学院博士後期課程に在学中の若手研究者によって執筆されている。彼ら彼女らがイスラーム社会やイスラーム教徒と接触する経験を、斬新な感覚で赤裸々につづり検討し、何とか解答を見出そうとした葛藤に満ちた思考がそのままに掲載されている。

「体験をそのままに」といっても、強力な好奇心とたゆまぬ探求心と洞察力を駆使していく、机上の常識とうわべの結論だけに頼っている私たちの先入観を打ち壊すような迫力を彷彿とさせる内容となっている。これまで既成事実のように語られてきたイスラーム世界の女性をめぐる狭い世界観から、著者たちの生々しい体験を通して、広い世界へ向かう人間像が表れてきた。

それぞれの著者が語るフィールドも、エジプト、パレスチナ、イスラエル、パキスタン、インドネシア、トルコ、イラン、フランス、モロッコと多岐にわたっているが、やはりエジプトが5名と最も多い。同じ土地で調査を行ったとしても、それぞれの研究者の研究目的・方針・立場などが異なっているために、似たような報告は一つもない。研究者の立場、視点、問題意識、関心の的などが異なっているために、異なった記述になって表現されるが、それらを総合して検討すれば、その地域の独自性だけでなく、他地域との共通性も明らかになる

ように見える。そういう意味では、フィールド調査の成果は、住んでみた地域、社会構造、対象とした人々の階層や問題意識、政治的状況などによって、今後も変化し続けるものであり、息の長い研究の継続が望まれる。

イスラーム世界は、その扉を固く閉ざしている保守的な世界だと思われているが、私自身が2. 3年おきに現地でかかわってきた通算15年の間にも、イスラームの受け止め方も暮らしも女性の立場も、大きく変化をしてきている。現今の調査結果が今後も継続するとは考えられないのであれば、今後も継続的な研究の実施が期待される。

最後に編著者の鳥山純子立命館大学准教授の手際のよい編集と、カイロでの個人的な実生活の経験から始まり、その後の丁寧なフィールド調査のなかで重要な研究成果を上げている点について高く評価できる。それはまさにフィールド経験を、先入観を廃して確かな分析力で現状を語ることの重要性を明らかにしたことであり、今後の研究のさらなる発展が期待される。

(紹介者：塩尻和子)

